



カクテル・パーティー

大城立裕

文藝春秋

カクテル・パーティー

定価 四三〇円

昭和四十二年九月二五日 第一刷

著者 大城立裕

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五一二一一

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

万一乱丁落丁本がありましたらおとりかえします

大城立裕（おおしろ たつひろ）

大正14年9月19日沖縄県中頭郡中城村
に生まる。沖縄二中を卒業後、
東亜同文書院に学んだが、
敗戦により中退。
現在 琉球政府通商産業局通商課長。
戯曲「明雲」以後、小説、劇作、演出
に活躍。第57回芥川賞受賞。
現住所 沖縄那覇市首里汀良町3ノ59

目次

シヨリーリーの脱出	255
カクテル・パーティー	177
亀甲墓	115
棒兵隊	93
逆光のなかで	71
二世	5

装帧
下高原健二

カクテル・パーティー

二 世

沖繩島の戦闘は、一九四五年六月二十三日に終熄した。それから数日後のある午下り、島の中
央部のR地区収容所の丘の上にある隊長室で、陸軍歩兵伍長ヘンリー・当間盛一は直立不動の姿
勢で、暑氣にたえていた。

「きみにいま最も大切なことは、自分の地位にたいする客観的な自覚だ、ヘンリー・当間。いま
この部屋できみを取りまいてゐるわれわれの仲間が認めるとおり、そしてアメリカ合衆国のどこ
においてもまちがひなく確認されたとおり、さらに、この沖繩島の住民も判断するであろうとお
り、きみはまさしくアメリカ市民出身の、日本語を話す兵隊なのだ。わかるか」

「わかります、少佐どの」

「しっかりと、か」

「しっかりと……わかります」

「よろしい。合衆国の良心がきみたち二世兵にたいする期待は大きい。国際的理解の楔となるべ
き使命は、きみたちの光榮ある荷となっている。その使命は、しかし、きみたちが合衆国軍人と

しての自覚にもとづいて行動したばあいにはのみ、果たされうる。このことを、きょう一日、よく考えたまえ」

数人の将校の視線をあげて、幕舎をでるとき、（懲罰はなかった）と考えた。

戸外にも風はなかった。

収容所といっても、比較的破壊の程度の軽かった村落を、有刺鉄線で遠巻きにかこつただけである。難民はここに集められて、壁のとれた家や、豚がいなくなつて乾ききつた豚舎に雑居した。つぎつぎと集められてくる者のために、どうしてもスペースが無理でなくなると、天幕小舎がたてられた。それさえ、R地区ではもはや数百にのぼつていた。それらのなかで難民たちは、部落の付近の畑から占領軍の兵隊の指揮にしたがつて掘つて得た甘藷を、鉄かぶとに煮炊きして食べてくらしていた。

食糧は自給の甘藷のほかに、携帯口糧ポータブル・ラションや罐詰が無償で配給された。主婦や娘たちのおもな任務のひとつは、隊長室のたてられた丘の脚下にある配給所に、紙函や空罐をかかえて、牧場の家畜のように群れ集まることであつた。

ヘンリーが隊長室を出たとき、ちようどなにかの配給があるらしく、女たちが群れていた。その無秩序な光景は、ひとつの壮観であつた。配給所の前の道路は、この村落が収容所になつてから石灰石を敷きつめて拡張された数本の幹線のひとつである。亜熱帯の強烈な日光は道路のまぶしいほどの白さに照りかえされたあと、ひとつびとの喧騒の声に攪拌されて、塵埃の厚くたまつた

樹木や屋根の上ですえてしまうようにみえた。

（まるで豚か鶏だ！）

ヘンリー・当間は、難民の群をみおろして、眉をひそめた。しかし、つづいて、（だが、ここはおれの父母の故郷だ。かれらはおれの同胞で、おれはかれら愛しているのだ）木に竹をついだような述懐を、それでも論理の上では何の反省もしないままに、靴をならしながら、丘をおりた。

彼は配給所の前で、ひとりの主婦をつかまえた。

「奥サン。新崎^{あしき}サンハ、ドコニイマスカ？」

主婦は、愛想よく腰を折ってから答えた。

「役所です……」

収容地区の役所は、ほとんど食糧の配給と作業員の動員や配置とのためにあったが、かたわらその事務所で、C I Cの取調べもおこなわれていた。はじめて収容所に入る者は、かならずここを通過するしくみであった。

氏素姓や当人の知識、思想をさぐるために調査票が印刷され、それによって、毎日毎日二十余項目にわたる訊問がなされた。難民のうち、教養のある者がみこまれて、その補助員にされた。戦争になるまで中学の地理、歴史の教師をしていた新崎憲治も、十数名の補助員に加えられていた。ヘンリーは、役所につくと、すぐ新崎をよびだそうとはせず、離れた位置でしばらく、訊問

をうける難民たちの群をみつめていた。ひとりひとりの顔を觀察するのだった。幾十かある顔をひとつとおり見終つてから、彼は新崎をよんだ。新崎はけだるそうに鉛筆をうごかしていたが、ヘンリーを認めると、すぐ鉛筆をおき、監督の米兵にことわつて、足ばやにやつてきた。

「いま来たんですか」

新崎のはずんだ調子の質問に微笑をかえしただけで、ヘンリーは促してそこを離れた。

新崎はあとに従つて歩きだしながら、一度ふりかへった。訊問所の天幕のなかまで強い西陽がさしこみ、補助員も難民もひとかたまりに灼けていた。新崎は、ほつと息をついた。補助員のどれもがいやがるしごとであつた。

話しながら歩いているうちに、住家の群からすこしはずれた松林にきた。

すぐ前はかなり広い田圃で、一面に葦がしげり、戦車が一台攔坐して錆びかけていた。眼をあけると、むこうに海が油をながしたようにおだやかにひろがっていた。

深刻な表情で話しているヘンリーが、いつのまにか新崎にみちびかれ、新崎は、そこまですると、木の蔭をえらんで腰をおろした。二抱えは優にある喬木が、一丈ほどのところで艦砲弾に荒荒しく折られていた。折れて地におちた分はもう薪にもつていかれ、ささくれだった折れ口が、天を刺しているようにあざやかだった。

新崎はそれを見あげて、

「それでは、隊長に叱られるのも、無理はないでしょう」

といった。

いかにも、聞きながしているような、かるい調子であった。ヘンリーは、浮いた足をすくわれたような気がして、新崎の顔をみつめた。

新崎のこうした口調に、ヘンリーはなれてはいた。ほとんどの難民たちが二世にたいしてとる態度は、敬遠するか媚びるかであった。年は四十だというが、五十ちかくにみえた。シナの戦線で右腕を失ったので、防衛隊に狩りだされることもなく、それでこんな年寄りや子供の多い非戦闘員の収容所に入ってきたのだった。

ヘンリーが知りあったのは、二十日ほど前である。当間盛次という名前の十五歳の少年がきたら知らせてくれ、弟だから。そうたのんだとき、新崎はちょっとのあいだ、なにかを見とおすすめな眼つきでヘンリーの顔をみつめたが、すぐ事務的な調子でメモをとり、「わかりました」といった。

ほかになにもきかなかったのが、意外であったが、ヘンリーにはかえって安心できた。ヘンリーは、その後二度、罐詰をもって新崎の天幕小舎を訪れ、ぽつりぽつりと古い話や新しい話をした。

しかし、新崎の身の上について、眼の前にいる家族（妻と十六歳の娘をかしらに三人のこどもたち）と、戦争まで中学の教師をしていたという経歴のほかにきいたことはなく、片腕のない身

体からにじみでる自信のようなものが、なんに由来するのか、満二十歳になったばかりで日本語も自由でないヘンリーにはよくわからなかった。ヘンリーにとっては、新崎という人間が、気のおけない話相手でもあったし、下手をすると叱られそうな先輩のようでもあった。

「無理ハナイ、ノデスカ？」

ヘンリーには、新崎の言葉がいかにも少なすぎるように思われた。

「僕ハ、沖繩人デスヨ。日本人デスヨ。自分ノ兄弟タチガ、ソノ中デ苦シンデイル壕ノナカヘ、手榴弾ガ投ゲコマレルノヲ、見ルコトガデキルト、新崎サン、思イマスカ。僕ガ、ソノトキ、ドンナ氣持ガスルカ、新崎サン、ワカリマスカ」

「わかりますよ」

「分ラナイデショウ、新崎サンハ……」

新崎は、やっと頭をまわして、ヘンリーをみた。それから、柔らかな笑みをふくんで、

「わかりますけれどもね、当間さん。ぼくには、あんたといっしょに行つたアメリカの兵隊たちの残念な氣もちのほうガ、よけいにわかるような氣がする。わかるというより、そのほうがあたりまえだとおもいます。壕のなかに人のいることがはつきりしていて、『デテコイ』と呼んでもでてこないとき、手榴弾でも火焰放射器でも打ちこむのは、あんたがたアメリカ兵にとって当然のことでしょう。それをあんたが無理にさせなかったというのは……」

「モシ、ソノ中ニ非戰闘員ガイタラ、カワイソウデハナイデスカ？」

「それよりもですよ。もしなかのひとたちが敗残兵ばかりだとしたら、そいつらが何時はいでし
てきて、アメリカ兵を射ち殺したり、住民から掠奪したりするか、わからない。いつてみれば、
あんたがたアメリカの兵隊にとっては、壕のなかの人間をそのままにしておくことは、自分たち
にとって危険な根をのこしておくことになるじゃありませんか」

「新崎サン、ヤッバリ、アナタハ、僕ヲ普通ノアメリカ人ノ兵隊トイッショニ考エテイマスネ」
「当間さん。あんまり考えすぎないほうがいい。ぼくがあんたをどう思おうと、そんなことは
関係なしに、日本の兵隊なら、ためらうことなしに、あんたをみたら射ち殺す」

この言葉は、ヘンリーには難しすぎた。ただ、最後の文句が、感覚的に彼の耳におそろしくひ
びいた。そのひびきから彼は、新崎の底意をよみとろうとした。すると新崎は、澄んだ眼に一瞬
めずらしく残酷なものをうかべて、とつぜん海を指した。

「当間さん、あんたは、ちかごろあの海をみて、なにか考えたことがありますか」

ヘンリーは、海をみた。浪がしらのみえない、しずかな青い海を、黄昏ちかい色あせた空が蔽
っているだけであった。いろんなことが、いえないえる、とヘンリーはおもった。自分はあの海
をこえてこの父母の国へやってきた、というのが、いちばん代表的な考えだとおもわれた。しか
し、いったいそれを新崎にいえばすむのであろうか、と彼は、海をみつめたままためらった。

「三カ月まえね」と、新崎がいった。「あの海には、北から南まで、軍艦がぎっしりつまって水
平線が一縷もみえなかったんです。西の海もそうだった。いま、こうしてながめていると、そん

なことがあったなどとは嘘のようです。しかし、ときどき、この静かさはほんものだろうか、などと考えたりします。でも、やっぱりほんものなんですね。この収容所で、みんなどんな話をしているか、ごぞんじですか。こんど戦争があったら、にげたりせずに、まっさきに捕虜になるんだと、……」

「ソウデスヨ！」ヘンリーは、はきだすようにいった。「アメリカハ、沖繩ノ民衆ヲ殺スコトハ、ゼンゼン考エテイナカッタ」

「……そんなふうに話しているということは、」新崎は、じぶんの調子をかえずにいった。

「けっきょく、いまのこの静かさをほんものだと信じていることなんですね。りっぱなものですよ、その信頼は。沖繩の人間は、よくひとを信じるんです。というより、信じたがります。現実が信用できないからですよ……」

新崎はもちろん、このような言葉がヘンリーの理解からよほど遠いことを知っていた。知った上で計算された言葉であった。彼にとっては、ヘンリーと彼らとの理解が、ヘンリーの考えているように近いものだとは思えなかったし、ヘンリーが素朴にもっている自信が小憎らしくさえあった。そのようなかき反撥が嗜虐的な計算をしたのだった。彼には、話しながら、ヘンリーの焦立っているのが測られた。それは、いかにも哀れなものに思えたが、同時にまたこのような過程でしか真実の理解には近づきえないことを、それになにより新崎自身の理解をたしかめえないことを、彼は考えていた。